
コイスルシカク

柏木一木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイスルシカク

【Nコード】

N17370

【作者名】

柏木一木

【あらすじ】

女性がモザイクに見えてしまう。そんな奇病の持ち主である双月庸一だが、特に危機感を抱いていなかった。だがある日、庸一は妹の裸を見てしまい、その夜、こともあるうか夢精をしてしまう。

このまま妹を意識し続ければ、肉親と言えども強硬な手段に出るのではないか。そんな極端な考えに至る庸一。このままではまずい。しかし、どうすればいい？「悩みは自分ひとりでは抱えてはならない。古今東西、物語においてたった一人で悩んだ主人公はろくな目に合わない。そして、その悩みの大概は家族や恋人、友人に

よって解消される。ならば、最初から話した方がよい結果につながる
る」しかし、自分を無為にさらけ出すことはできるだろうか？
それでも、それが最善手であることは理解していた庸一は、親友に
相談を持ちかけることを決心する。

<Chapter 2までのあらすじ> タイトル変えました。

Chapter 0

ジジジジジジジ。

あれはなに？

あ、こら、子供はそんな番組を見ちゃダメだ。ユミコ！ お前は、なにやっているんだ！

ご、ごめんなさい。

ねえ、この四角はなんなの？ どうして、ヘルメットを被った人が四角のものを持ち上げているの？

はあ、しょうがないな。見てしまったのならばしかたがない。

あれは、モザイクといって見てはいけないものを隠してくれるんだ？ 見てはいけないもの？

そうだ。ヨウイチだって、見たくないものがあるだろう。???

例えば、そうだな、お母さんが怒った顔とか。

でも、お母さんは怒らないよ。だって、やさしいもん。

ジジジジジジジ。

ごめんなさいごめんなさい。

ぼくがわるかったんです。

だからやめて。

ジジジジジジジ。

Chapter 1 - 1 : 変わらない日常はラジオから (前書き)

constant obstacle <コンスタント・オブスタ

クル>

意味：常に存在する障害

意識：目の上のたんこぶ

Chapter 1 - 1 : 変わらない日常はラジオから

『Goooooooooooood morning.』

朝。ミニコンポから流れる陽気なDJの声で、いつものように俺は目を醒ます。なにか夢を見ていたような気がしたが、霞を掴むように、その内容を思い出すことはできなかった。パジャマ代わりに使っているティシャツが夏でもないのに汗ばんでいる。

悪夢でも見ていたのだろうか？

まあ、たいした夢ではないだろう。

ベッドから起き上がり、目覚まし代わりにミニコンポに手を伸ばす。DJが八十年代の有名な洋楽の紹介を始めたとき、ミニコンポの電源が落ちた。一瞬だけ流れたイントロに、なにか心に惹かれるものを感じたが、もう一度電源を付ける気にはなれない。そういえば、いつも曲名だけ聞いて、そのあとに流れる曲をまともに聴いたことがなかった。

通学の準備を終えたあと、一階の洗面所へ向かう。鞆を足元に置き、顔を洗おうと蛇口を捻ろうとしたとき、髭剃りの後なのだろうか、黒い粒が洗面器に流し落とされることなく残っていた。

さながら、シチューの上に振り撒かれたコショウのようだ、などと髭カスを表現するにはいささか美麗句が過ぎるだろうか。

「あとから使う人がいるのだから、もう少しキレイに使って欲しいもんだなあ」

と目の前にはいない父親に対して愚痴をこぼしながら、蛇口をやや強めにひねり、撫でるように手のひらを使って髭を洗い流す。

これで見えた目はキレイになった。しかし、このまま水を溜めて使うには、小さい粒子となった髭が目刺さりそうで躊躇せずにはい

られない。かといつて、目を強くつむったままで顔を洗うのは、なにか違うような気がする。

そんなどうでもいいことに悩んだ末、蛇口から手のひらに直接水を溜めて顔を洗った。

「しかし、珍しいこともあるものだ」

タオルで顔を拭きながら思わずそう呟いた。

一番朝早いのは母、次は仕事場が遠い父、その次は運動部に所属している妹、最後に帰宅部の俺という順番だ。

朝のスケジュールはよほどのことがない限り狂うことはない。

今日はなにか特別な日だっただろうか？

首を傾げながら居間のドアを押し開くと、母がいつものようにテレビにかじりついて見ていた。

「おはよう、母さん」

「おはよう、庸一さん」

母さんは、視線を向けず半ば自動的に挨拶を返す。朝の連続ドラマの面白さはわからないが、視聴率から鑑みるに中年女性の心を鷲掴みにするなにかがあるのかもしれない。

邪魔しないように、テーブルに置かれた自分の茶碗に手を伸ばす。そのとき、妹の茶碗が手つかずに並んで置いてあるのに気がついた。

「あれ、美希はまだ起きていないの？ 部活は？」

「さあ？」

「起こしてあげようよ」

「そうね」

どつちら母さんはテレビから目を離すつもりはないらしい。

「レギュラーとってたって喜んだばかりだし、遅刻して監督の印象を悪くするのもかわいそうだ」

そう独り言のように呟くと「美希をよろしくね」と無責任な言葉で返した。

「はいはい」

俺はやる気のなさそうにぶらぶらと手を振って廊下に戻る。そして、妹の部屋へ続く階段を見上げた。

俺と美希の子供部屋は三階にある。

美希のようにバスケツト部で鍛えられているのならばまだしも、間違っても往復するような状況にならぬよう、洗面所で制服が濡れる危険を冒してでも起床後すぐに着替えて行動するよう心がけている、帰宅部で身体を動かすことをさほど愛していない俺には多少骨の折れる道程だ。富士の登頂よりも緩慢としているが、それでも確実に体力を消耗させるに違いない。

「面倒だ」

口に出して再確認せずとも大変面倒であるのは覆ることはない。とはいえ、自分から言い出した手前、引き返すことはできない。それに、家の階段を目の前にして躊躇するのも馬鹿げた話である。そう考えていたにもかかわらず、「さてと行くか」とまるで気合を入れるかのような言葉が唇から漏れた。

やれやれ。

とくに息切れすることもなく、美希の部屋の前にたどり着いた。

さて、何の気なしにここまで来てしまったが、身内とはいえ思春期の娘さんの部屋に入ってよいものだろうか？

ひとまず、美希の部屋に最後に入ったのがいつのことなのか思い返す。まったく思い出せない。少なくともここ一年は入ったこともなければ、中の様子を覗いた記憶もなかった。

なるほど、俺は妹にまったく興味がないようだ。

しかし、美希との仲はそれなりに良好であると確信を持って言える。会えば話すし、その会話の中で互いに笑顔を零すことができるのだから関係が悪いわけがない。

そんな仲がいい兄妹なのだから、思春期であろうとも気にせず部屋に入っても問題ないだろう。そう言い聞かせてドアノブを捻ろうとしたとき、部屋の中からけたたましい音が聞こえてきた。目覚まし時計だ。目覚まし時計は自分では考えて動くものではない。ということ、妹はこの時間に起きるようあらかじめ目覚ましを設定したということなのだろう。

なんだ、わざと寝坊したのか。

しばらくすると、叩きつけるような音が聞こえ、あたりは静けさを取り戻す。ドアノブから手を離すと、手のひらが少し湿っているのに気がついた。少しほっとした自分がいる。やはり、慣れてないことはするものではない。

居間に戻り、朝食に用意された目玉焼きの黄身だけを残すよう集中して食べていると、廊下から雪崩のような足音が聞こえてきた。そして、ドアが開くと深い息を吐き出しながら立っているパジャマ姿の美希がいて、「なんで起こしてくれなかったの！」と怒ったような、泣いているような表情を浮かべていた。

「あれ、部活ないんじゃないの？」

「誰がそんなこといったの！」

「いや、聞いてないな」

「じゃあ、今日は何の日？ 特別な日じゃなかったら、今日はいつもと変わらない日に決まっているじゃん。毎日はエブリデイだよ！ いつも昨日はイエスタデイ！」

「なにを言う。毎日、なにかしらの記念日が設定されているし、誰かしらの誕生日だ。特別じゃない日なんて一日もない。だから、突然部活が休みになってもおかしくはない」

「それって詭弁！」

「そうだな。でも、なんであんな時間に目覚ましを設定したんだ？」

当然の質問をすると、美希は苦虫を潰したような表情を作る。

「昨日休みだったでしょ？」

「だから？」

「もう、わからないかなあ。昨晚、設定を戻さずに寝ちゃったんだよ」

「なるほどね。どうするんだ？ 朝ご飯食べていくのか」

「もちろん食べるよ。もう朝練に出れないのは確定だからね。無理しても仕方ないし」

先ほどまで勢いはどこにいったのやら、泣いた狸がすぐ笑うように、美希は鼻歌を口ずさみながら台所へ向かっていった。

ポジティブシンキングというか、サバサバしているというか、妹は大物だ。ただ、無責任か粗忽者に見えなくもなく、兄として心配せずにはいられない。

「もう少し、気落ちした方がいいんじゃないか。ああ、なんで私はいつもこうなんだろう、とか」

「それはしているよ。やつちゃったって、て
「軽いなあ」

「でも、過ぎたことじゃん。時間は有限だし、いつまでもくよくよするなら次に備えた方がいいと、あたしは思うの」

「至言だね。美希語録に新たな一ページが加えられた」

「なにそれ？ ほかに何かあるの？」

「『あたしはゴキブリを尊敬する。一億年前からその姿を変えていないとするならば、進化を終えた生体、つまり完璧な存在 すなわち神なのだ』」

「そんなこと不謹慎なこと言わないよ！」

実際に美希がそんな至言を口にしたわけではない。しかし、この着想はゴキブリに相対したときの美希の吐き捨てた言葉から生み出されたものであったので、俺としては美希に著作権があると考えているし、そこは拘っていききたい。

「しかし、ゴツキーはなんであそこまで嫌われるのかわからないね」「ご飯食べているときに、そんな話題しないでよ」

しかめっ面をしながらも、美希は自分から話を繋げる。

「まあ、好かれる要素がないからじゃないかな。よく言うじゃない。好きの反対は嫌いじゃなくて無関心だって。好かれる要素がなくて無関心にもなれないんだったら嫌いになるしかない。つまりそういうわけ」

「食を愛して止まない日本人にとって、台所に出没するゴツキーは、無関心になれるわけがないと」

「かもね。あとね、名前に原因があるんじゃないかな」

「名前？」

「ゴキブリって濁点が多いじゃない？ バクダンとか、嫌われてるのは大体濁音あるし」

「でも、ブラジャーは好かれていると思うよ」

「あたしは好きじゃないな。蒸れるし」

と平然に答えたあと、美希は表情を赤らめる。

「つていうか、兄さん、いったい何を言ってるの!」

「ん? いや、思いついた濁音が多いのを口にしてみただけけど」

「でもなんで、よりによってブラジャーなわけ? 他にもあるじゃない。たとえば ええと、まあいいや」

「どうやら思いつかなかったらしい。ちなみに、俺がブラジャーの次に思いついたのはガンダムだ。」

「ははん、おにーさんも好きなんだ。このドスケベ」

「んーブラジャーよりもおっぱいの方がいいなあ。やっぱり人間は中身だよ」

「普通、それも外見って言わない?」

「じゃあ、外見でいいや。ほら」

「『ちよつとでいいから、そつと見せてくれよ』なんて言わないよね?」

「ああ、言うわけないだろ。そつと見せてくれなんて、馬鹿らしい。そんなダジャレを言うわけないじゃないか」

とつくに朝食を食べ終えていた俺は、鞆を手に取り立ち上がる。その場から逃げ出すような形になってしまったが、別にそういうわけではない。大切なことだから繰り返すが、別に逃げ出すわけではない。

「おお、最後は《ダジャレ》とオチをつけましたか」

と、知った風に妹がニヤニヤ笑いながら言うのを無視して居間を出た。

さて、学校へ出かけるか。

俺は玄関の扉を開ける。斜めに浮かぶ太陽が世界を一瞬だけ真白に染めたあと、見慣れた町並みを描き出す。そこに、偶然通りかか

ったのだろう。《モザイク》が俺の目の前を横切ろうとする。しかし、その《モザイク》は通り過ぎることではなく、動きを止めた。

「あら、庸一くん。おはよう」

どうやら、その《モザイク》は隣に住む北村のおばさんだったらしい。「おはようございます」と挨拶を返すと満足したらしく、北村のおばさんはその場から立ち去っていった。

こうしたやり過ぎしもまた、平穏なる日常の一部だった。

Chapter 1 - 2 : 《モザイク》に関する考察 その1

《モザイク》。それが見えるのが異常な光景であるのは理解している。

しかし、俺が物心つく頃からこんなだったので、いまではさほど気にはしていない。

《モザイク》が適応されるルールは単純だ。俺の視覚では、女性にモザイクがかかるらしい。ただし、例外的に家族はそのルールから外れるようだ。

原因はわからない。

この世には人の顔を認識することができない『相貌失認』という病気が存在している。前にネットで調べてみたことがあるのだが、自分のそれとはなんか違う気がした。

病院に行けば、原因究明とそれ相応の名前をつけてもらえるに違いない。しかし、女性が《モザイク》に見えたところで、特に生活に支障があるわけでもなかった。もちろん、それなりに親しい異性に話しかけられたときなど返事を窮することは間々あるが、取り繕うことができないわけではない。

正直なことを言えば、医者に異常者と宣言されるのが怖い。

自分がおかしいのはわかってているが、第三者にそう指摘されると自分の世界が壊れてしまうような気がしてならない。

だから、俺は自分の中に秘密をしまいこむ。自分の中だけでこの異常を定義する。

モザイク病。

それが俺が名づけた異常の名前で、それ以上のことは深く考えないようにしていた。

植物の病気で同名のものがあるが、まあ、それも認識しないようにしよう。

学校に近づくと《モザイク》がうごめいていた。こんな病気だから異性に興味がないのだが、プレイボーイがいう「世界の半分は女なんだぜ」という言葉を実感する光景である。

そんなことを思いつつ昇降口に向かうと、後ろから声を掛けられた。

「おお、同志双月よ。元気にしているか」

「おはよう、佑哉。とくに変わりはないよ」

彼の名前は関原佑哉。甘いマスクと長身はさながら芸能人かファッションモデルに見えなくもない。しかし、彼女はいない。作ったことも作ろうとしたこともないらしい。それは、挨拶一つからわかるように、全身から醸し出している変人オーラのせいだろう。また、性格だけではなく女性に好まれない決定的な理由がもう一つあった。

「それはいかな。貴公はご拝見しなかったのかね、女神の勇姿を。我輩のように衝動を抑えられなくなっていたはずだ！」

「女神？ ああ、”なのな”のことね」

「そう、なのな様だ！」

なのなというのは、土曜日の深夜に放送されている美少女アニメ『魔法王女マジカルなのな』の主人公の名前だ。佑哉は彼女に惚れ込んでいる、ぶっちゃけて言えばオタクである。それも重度な。

俺は彼の数少ない友人であるのだが、決して重度なオタクではない。しかし、一般人に比べるとその手の知識は豊富だし、マンガやゲーム どれも成人指定の作品も所持している。しかし、これにはちゃんとした理由があるのだ。

モザイク病のルールの追加説明になるが、対象である女性というカテゴリは、写真やテレビなどにも適応される。つまり、写真集やアダルトビデオは思春期まっただなかを過ごしている男の子の

性欲を吐き出すアイテムとして使えないというわけだ。

上級者になれば、妄想でことを成すことも可能なんだろうが、残念なことに俺は女性というのをよく知らない。唯一の存在が家族であり、それを欲情の対象にするのは自分の倫理観がそれを許さない。そうなるのと別の吐き出し口が必要になる。

いろいろ調べた結果、マンガやアニメなどの人の手で作られたものにはルールが除外されることがわかった。三次元がアウトで二次元がセーフといえば一部の人にはわかりやすいだろう。

とまれ、俺は性処理のために、二次元ポルノに手を出すようになったわけである。

最初は店頭で買う恥ずかしさも手伝ってソフトなものを購入していたのだが、慣れというのは恐ろしいものだ。いまでは、周りを気にすることなく、コアなものばかり買い漁るようになった。

もちろん女性店員であつても気にしない。むしろ、モザイクで隠れている分、男性店員よりも買いやすかったりする。モザイク病の数少ない利点の一つだが、人に知られたくないような二次元ポルノは、一般的な書店にはあまり置かれていないため、あまり活用されることはない。

そんな俺と佑哉の出会い、郊外にあるアダルトものをメインに揃えている書店だった。

最初、俺は佑哉が店頭にいるのに気がつかなかった。それはそうだろう。慣れたとはいえ、多少は後ろめたい感情を抱きながら、そういうお店に入るわけだ。なるべく人の顔を見ないように、棚に陳列された本に意識を集中するにしているのが礼儀である。

「君は、うちの学校の人じゃないか？」

と声を掛けられたとき、なぜか人生が終わったような衝撃を抱いたのを今でも憶えている。

「え、あの……君は？」

「自己紹介がまだだったな。吾輩の名前は関原佑哉。1 - Aに所属している」

俺が周りを気にしてしどろもどろに答えたのに対し、佑哉はまるで町中で偶然出会った友人に対する口ぶりだった。こんな場所で話を続けられるほど心臓に毛は生えていない俺は、顔に手を当てた。

「ここで話すのはまずいんじゃないかな？」

「おお、そうだった。吾輩たちは」ここで声を潜める。「青い春を謳歌している世代だからな」そしてにやり。「じゃあ、外に出ようか」

そのとき、佑哉は素性も知らない人間に過ぎなかった。正直、一切関わりたくなかったもなかったのだが、そう促されては強く断ることもできなかった。店を出たあと、近くの公園に俺らは向かう。そして、佑哉はうれしそうな笑みを浮かべた。

「いやあ、うちの学校にも同志がいるとは思わなかった」

「同志？」

「君もオタクなのだろう？」

俺は二次元ポルノを性欲の捌け口に行っているだけで、オタクではない。

であるからして、それは佑哉の勘違いなのだが、二次元ポルノ愛好家同士ウマがあっってしまった。こうしたきっかけから一年が経ち、同じクラスになり、親友と呼べるような関係となった。

これは俺にとって、大変珍しい出来事であった。

中学までは知人はそれなりに居たが、親友と呼べるような仲間はいなかったと思っている。親友という定義は人それぞれで曖昧なも

のだから、俺の定義に過ぎないのだが、「好きなものと嫌いなものを共有することができる」関係だと考えている。色んなものを曝け出している関係とも言えようか。

バカな話だが、十代の男子の関心は大きな割合で女の子のことを占めている。誰が好き。あのアイドルが好き。童貞を捨てたい。そんなどうでもいいことを共有して関係を深めていき、信用し、そして仲間と呼べる関係を構築できるのだ。

だけど、俺はそれができなかった。女の子を見ることができないのだから、その話題についていけないわけがない。もちろん、友人達の話をあわせることは可能だ。でも、そうした上っ面だけの会話で仲間意識が芽生えるのだろうか？

俺はそう思わない。いや、俺がそう思えなかった。

知人は俺のことを仲間だと思っていてくれたかもしれないが、俺の方は仲間意識を最後まで抱くことができなかったのだ。

方や、佑哉との関係は、性癖を曝け出すところから始まった。そのおかげもあつたのだろう。それが現実の女の子ではなく、二次元の女の子であつたとしても、それは同じ効果をもたらしたのだと思つている。

この狂つた世界において、家族以外の尊い存在である。

「なのな様の蔑む視線、口汚い罵倒は俺の中のかなにかを刺激する。ああ、どうしてテレビの中から出てきてくれないのだろう。罵つてくれないのだろう。魔法少女なのだから、それくらいの奇跡を起こしてもいいはずじゃないか」

その親友なのだが、今日もまた朝からテンションを高くして、なのなについて熱く語り始めた。たまに思う。友人がもつとまともな人間だつたら良かったのにな、と。

「ゲームにおいて即死魔法がボスに効かないように、画面の中から

現実に出てくるのは不可能なんじゃないか？」

「裏技使えば可能じゃないか」

「それはバグだろ？ 彼女が暮らしている世界は完璧だから、そんな不具合はないのさ。そんな適当な世界の天使をお前は愛しているわけじゃないだろ」

「いい返答だ。しかし、美少女ゲームの女神たちは出てくる気配がないのだが、それはなぜなのかね」

それは深く難しい質問だ。

上手い切り替えしを頭を巡らせていたとき、予鈴のチャイムが鳴った。

「とりあえず、教室に向かうか」

というと、佑哉は子供が宝物を見つけたときのような、輝かしい笑顔を浮かべた。その反応に俺は「おや？」と思った。

平均並みの学力しかない佑哉が、授業が始まるのが楽しいと思うほど勉学を愛しているとは思えない。ならば、別の理由があるのだろう。しかし、全く思い当たらなかったため、直接聞いてみることにした。

「……あのさ、なんでそんな表情をしているんだ？」

「ん？ ヘンな顔をしているか」

「いや、なんか楽しそうだぞ、お前」

「表情に出してしまったか。自分では隠しているつもりだったんだけどな。仕方がない、同志である庸一には教えよう。そこに運命が待っているからだよ」

こいつは一体なにを言い出すのだろう。

「君は、まだ物語の王道というのを知らないらしいね。物語の始まりは、いつだって転校生から始まるのだよ」

「つまりこういうことか？　いつか転校生がやってくるかもしれないから、それを心待ちにしている。そのことを考えると楽しくて仕方がない」

「そのとおり」

「……一度、お医者に見てもらった方がいいんじゃないか？」

自分のことを棚にあげた発言だが、思わず口に出た。しかし、佑哉は飄々とした表情を浮かべるだけだった。

「宝くじが当たるのを夢想するのと同じさ。そこまで過度な期待はしていないし、誰かに迷惑をかけているわけでもない。それで毎日が楽しくなるのならば、ポジティブシンキングでいいことじゃないか」

「まあね」

勝手に思っている分には、誰にも迷惑がかからないから別に構わないか。

人の心を覗くことなんて誰にもできないのだから。

Chapter 1 - 3 : 転校生

「さて、一学期も半ばを過ぎようとしているが、このクラスの仲間が増えることになった」

担任の吉原先生の台詞を受けて、教室にはどよめきが走り、お約束のようともいえる美形の異性を渴望する声がわいた。

方や俺はというと呆然としていた。まるで、朝の会話が前振りのようなのだ。思わず佑哉の方を向くと、彼は親指を立てて見せた。言葉はないが「お前の会話がフラグになったぜ」と言いたいのだろう。偶然とはいえ恐ろしいタイミングである。

「おちつけ。過度に期待されては、中に入ってくるのに躊躇するだろ？ まあ、躊躇したところで、入ってこないという選択肢はないんだがな」

はっはっは、と吉原先生は豪快に容赦なく言い放つ。

「ほら、入れ」

「失礼します」

教室のドアが開き、《モザイク》が姿を見せる。そして湧き上がる男達の大歓声。

どうやら、かわいい女の子がやってきたようだ。この感動を分かち合えないのが少し残念でもある。

「はじめまして、佐伯千綱です。親の仕事の都合で、中途半端な時期への編入となりましたが、仲良しくないと嬉しいですよ」

定型句のような挨拶だったが、なにか引つかかるものを感じた。
千綱……そうだ、彼女の名前が俺の過去を刺激したのだ。

その記憶は甘いものではない。むしろ苦い記憶だ。俺は、幼稚園の頃、同じ名前を持つ女の子に虐められていたのだ。

もしかして、まさか？

いや、そうではない。俺を虐めていた女の子の苗字は「フタバ」だったはずだ。俺の苗字と「フタバ」までが同じだっただけなのに、同年齢の男の子たちに「夫婦だ！」とからかわれた嫌な記憶があるので間違いはないだろう。

たとえ本人だとしても、今更虐められるなんて思わない。あくまで幼少期の出来事である。でも、一瞬肝が冷えた。顔さえ見えれば、面影がないことで安心できただろうが、モザイクのせいでそれは叶わなかった。

「佐伯、自己アピールくらいしておけ」

「……はい。ええと……趣味は読書で」

「どんなの読むのー！」

と松岡の大声が教室に響く。

「マ……じゃなくて、宮部みゆきとか村上春樹とか……そのあたりの作家の本を読みます」

なぜか「すごいねー」という声があがった。

モザイク越しなので表情はわからないが、俺ならきつと苦笑いを浮かべていたところだろう。佐伯が挙げた作家は当たり前障りのないメジャーな作家だったからである。もちろん、本当にメジャーな作家しか読まないのかもしれない。二次元ポルノ愛好家であり、嗜む程度には読書を好む俺には、やや物足りない情報だ。

そんなことを考えていると、佐伯の自己紹介は終わっていた。

「それでは用意しますね」

と言つて佐伯は教室へ出て行つた。

「ん？ どういうことだ？」

「同志よ。少し考えればわかるだろう」

「ああ、なるほど」

今朝までうちのクラスに空いている席なんてなかった。ならば、佐伯が使う椅子と机を用意する必要があるというわけだ。

俺と佑哉との会話で気づいたのか、我先にと言わんばかりに一部の男子が立ち上がった。それに対し、止めるように吉原先生が一喝硬派で名が通っているクラス委員の村瀬に手伝うよう命じた。

これが漫画とかだと、あらかじめ教室内に用意されているものだけど、現実はそのようではないらしい。きつと、そうでもしておかないと物語のテンポが悪くなるからに違いない。

現実というのは、かくしてつまらなく出来ているようだ。

一時間目の担当も吉原先生だったこともあり、計らいでクラス全員による簡単な自己紹介をすることになった。

その内容は、クラス替えの都度に行われる自己紹介とは若干違って見せる。というのは、「俺も『ノルウェイの森』が好きです」など、佐伯に興味のある人間は、数少ない情報から彼女の琴線にかかるとようなアピールをしていることだ。これはクラスメイトの読書歴を知ることができて面白い。

「我輩の名前は」と佑哉が立ち上がり自己紹介を始めた。甚だ信じられないのだが、空気を読めないわけではなかったらしい。ほかの連中にならい、本について語り始めた。

「吾輩はライトノベルが好きだ。最近の表紙は可愛らしい女の子ばかりで誠にけしからん。内容とは関係なく買ってしまうのではないか！」

奴は朝、運命が待っているとか言っていたが、たとえ彼女が世界の命運を左右する女の子だとしても、そのフラグがいまの発言でバキバキ崩れただろう。少なくとも俺は、ラノベから始まる出会いを題材にした小説をラノベでも見たことがない。しかし、佑哉は説明が終わると満足したように腰を下ろした。奴の中では、運命が始まったのかもしれない。

とまれ、次は俺の番である。このあとならば、受けを狙う必要はないだろう。むしろ、皆が呆けている隙に終わらせるのがよさそう。俺は静かに立ち上がる。

「僕の名前は双月庸一です。好きな作家は井上夢人。残り一年と十ヶ月ですが、仲良くなれたらいいなと思っています」

気持ち早口でしゃべり、終わると同時に席に着く。心の準備ができてなかったのか、次の志村は慌てて立ち上がるうとして机にひざをぶつけた。大きな金属音を教室に響くと、「なにやってんだよ」とほかの連中から揶揄が飛ぶ。

志村はこの状況は逆においしいと感じたらしく、鼻の穴を大きく広げ、自分がさもクラスのムードメーカーであるかのようにおどけて見せた。

この志村の行動に対し、いつもならば俺も笑っていたのだろうが、そのときはその気になれなかった。勘違いかもしれないが視線のよくなものを感じるのだ。

周りを見渡すが、若干テンションが高い野郎連中とうごめいている《モザイク》が見えるだけ。もしかすると、この中に志村の好きな女子がいて、余計なことをした俺を恨みたらしく睨みつけている

のかもしれない。たとえそうだとしても、それが誰なのか俺には知るよしもなかった。

佐伯への自己紹介はつつがなく終わり、通常通り授業が始まった。しかし、教室の中は浮ついた空気が蔓延しており、集中している状況からは遠く離れていた。

その様子を鑑みた吉原先生は、意地悪く質問を生徒にぶつけはじめる。数人がこっぴどく叱られた結果、結果的にこれまでにないほどの剣呑な空気に包まれた授業になった。

チャイムが聞こえ、全員が安堵の息を吐き出す。号令がかかると、佐伯の席に多くの人間が集まり始めた。女子が誰だかわからない状況でも、教室の隅に集まれば、いくら俺でもそれくらいはわかる。彼女の席は、廊下側の一番後ろの席だった。

「ふむ、おろかなものだな」

その様子を眺めながら、佑哉は呟く。

「なにがだ」

「物語の主人公は、ああいう風に烏合の衆とは交わらないものだ。つまり、あそこの連中は物語への介入を諦めたことというわけだよ」「本気言っているわけじゃないだろ」

「もちろん、ちゃんと現実を直視しているさ。そこまで我輩の脳味噌は狂っていない。それに恋が青春の中で、必ずしも尊いわけではない。優劣は自分の中にのみ存在する。恋よりも楽しいものがある以上、それを楽しむまでだ」

にやりと佑哉は笑う。甚だ理解できないのだが、楽しいと思っているのならばそれで構わないだろう。

「しかし、彼女は我輩に気があるのだろうか」

「お、なんだ。偉そうなことを言いながら、やっぱり佐伯に興味があるのか。佑哉が現実の女の子に興味を抱くなんて、お兄さんは嬉しいぞ」

「いやそうじゃない。同志は気がつかないのか、佐伯はこっちを見ているぞ」

無意識に佐伯の方を見やる。しかし、モザイクのせいで視線どころか、どれが佐伯なのかわからない。

「気のせいだろ？」

と適当に返す。

「そうか、やけに視線が合っんだが」

「まあ、意外とラノベを読んでいるのかもしれないな」

「そうか。もしそうならば喜ばしいことだ。せっかくだし、一冊貸してみるかな」

「まで、一体なにを貸すつもりだ」

「『EGコンバット』」

それは、クライマックスを目前にして、ぱったりと続巻が発売されなくなったライトノベルだった。評判は高く、多くの読者から続きを渴望されているが、十年たった今も新刊は発売されていない。

「いや……それは完結してから貸してやるのが優しさだろう」

「じゃあ、二度と貸す機会はなさそうだな。この悲しみを共有すること、つり橋効果のように恋愛感情を芽生えさせるかもしれない」といっのこ」

そんな歪んだ恋の始まりは、お金を積まれても勘弁したいものだ。
ん？ ちよつと待て。

「俺に本を貸したのは、そんな魂胆だったのか!？」
「そうだ。もちろん、恋愛感情は含まれていない。我輩は二次元幼女愛好家だからな」

佑哉は、自分の性癖をさも当然のようにカミングアウトする。そして、話を続けた。

「物語を介し、その感情を共有することもまた相互理解の一步であると考えている。しかし、それは人の心の側面であり、すべてを理解することは叶わないだろう。それでも、一つの要素でも理解しているという事実は、信頼を抱くのに十分な理由となる」

「物語を介さないとなかなかわかってくれないのが、お前の悪いところだな」

「そうだな。しかし、言葉と同じコミュニケーションツールのようなものだ。嗜好性と志向性が定まっている故に、わかりやすいのもまた事実。我輩と同志の関係のように」

「わかりやすい、ね」

俺は女性のことをよくわからないものだと感じている。顔さえ見えればわかるのか、と問われれば肯定はできない。しかし、モザイクが女性を得体の知れないものだと認識させる。

きっと、モザイクという性質がそう思わせるのだろう。

従来、モザイクは見てはいけないものを使われるからだ。

Chapter 1 - 4 : 裏表ラバーズ

「双月は、参加するののか？」

クラスメイトの持史に声をかけられたのは、放課後になってのことだ。

「なにかあるのか？」

「転校生の佐伯を歓迎する会だよ。人数が少なければカラオケに行くし、そうじゃなかったらファミレスに行くつもりなんだけど」

「持史はどっちがいいんだ？」

そう訊ねたのは、参加するしないどちらでもよかったからだ。

皆で楽しくわいわいするのは嫌いじゃない。しかし、俺は佐伯に興味がない。ならば、彼女に好意を持っている人間がいいようにするのがいいだろう。

「カラオケだな。俺の甘い歌声を聞かせれば、彼女が恋に落ちるかもしれない」

「恋に落ちる……ね」

本日二回目となる「恋に落ちる」発言だ。思春期の男は皆同じことを考えており、自分のような人間の方が間違っているのかと錯覚しかける。まさかと思うが、そういった点は自分自身を信用できないので否定はできない。

「恋に落ちることを考えた方がいいのかね」

「お前も彼女を狙っているのか。これは失敗したな」

俺のどうでもいい呟きに、持史はしまったと言わんばかりに額を叩く。

「いや、今後の自分の身の振り方をだな」

「そうか、猛烈にアタックするということだな」

「そうじゃなくて　まあいい。人数が増えて欲しくないんだろ？　だったら参加を辞退するよ」

「そう言うなって。どうせ人数が膨れ上がるだろうから、ファミレスなのはほぼ確定だ。行くにしても二次会だろう」

「にしたって、人数が少ない方が話す機会は増えるだろう。なにか理由があるのか？」

俺と持史の関係は、同じ中学出身であり何回か一緒のクラスメイトになったことはあるが、それ以上のもではなかった。クラス行事のようなものだし、誘うまでは理解できる。しかし、先ほどの発言から鑑みるに奴の中では佐伯を狙うライバルとなっているのだ。断れば喜びはするだろうが引き止めるには理由がない。ならば、目的があると考えるのが自明だ。

「その疑問はもっともだ。口止めされているが、この際無視だ。はっきり言おう。お前のツレに興味を抱いている奴がいる」

「ツレというのは佑哉のことか？」

持史はうなずく。

「そいつは……本気なのか？」

「本気なんじゃねーかな。篠田がなに考えているのかわかんねーけど」

「篠田ねえ」

誰のことを言っているのかさっぱりわからないがオウム返しのように呟く。すると、持史は強調するように「ああ、あの篠田しのぶだ」と言い直した。あの、と言うくらいだから美人に違いない。まったくもって妬ましい。

「しかし、なんてつたつて佑哉なんだ？」

「たぶん顔じゃないか？」

「でも、性格があれだぞ」

「俺もその意見に同感だが、ツレをそう悪くいうなよ」

呆れたような表情を持史は浮かべる。

「状況はわかった。つまり、篠田は俺から佑哉の情報を少しでも引き出そうという魂胆なわけだな。しかし、お前が篠田という美人さんと仲がいいのは知らなかったな。どういう経緯だ？」

「なに言っているんだ。お前も含めて、俺たち同じ中学出身じゃないか」

「そうだった？」

「お前は昔から女子に興味がないんだな」

しょうがないだろう。女子はみんな同じに見えるのだから。その台詞を言ったところで、また呆れたような顔をされるだけだろう。

無言のまま、とぼけたような表情を浮かべて返した。

佐伯の歓迎する催しには男女含めて十五人が集まった。

席順を決めるのに混乱が生じたが、誰かが作ってきたくじで決めることになり、その結果なぜか彼女の隣に俺が座ることになってしまった。

「持史、席を変えることはできないのか？」

「俺もそうしたいのは山々だが、ベストポジション過ぎるせいで、それは難しいだろう。席を立つのは不自然だし、俺と変えると他の連中にやっかみを受けそうだ。席替えはするだろうから、それまで佐伯と楽しんでいてくれよ」

持史はそう言ったあと「仲良くなりすぎるなよ」と釘を刺した。さて、どうしたものか。

数人が席を立ちドリンクバーへと向かう姿が見えた。

「佐伯は、頼んだか？」

「え!？」

佐伯は驚いたような声を挙げた。後ろから突然声をかけたわけじゃないのだから、そんな反応はしてもらいたくないものなのだが。

「飲み物。ドリンクバーくらいはさすがに知っているだろ？」

「ま、まだ」

佐伯の声は妙に硬い。自分では平均的な容姿だと思っているが、彼女の目には性欲過多のゴリラにでも見えるのだろうか。表情を見ることができず、反応やししゃべり口調だけ判断しなければならぬのがモザイク病のやつかいなところだ。

「てつきり誰かが率先して持ってくるかと思っただけだな。なにが欲しい？」

「ウーロン茶」

俺はドリンクバー向かって「ウーロン茶二つよろしく」と叫ぶ。

「あいよー」と返事が戻ってきた。これで大丈夫だろう。

このまま無言でいるのも苦痛なので、俺は彼女に話かけることに

した。

「自己紹介はしたけど、憶えてないないだろうから、改めしてはじめまして。俺は双月庸一」

「あ、うん。わたしは」

「ちょっと待て」

俺は、佐伯が自己紹介しようとするのを静止する。

「自己紹介をされるほど佐伯のことを知らなかったら、俺はファミレスにご飯を食べに来ただけの人間になるぞ」

「じゃあ、庸一くんは、わたしに興味があったってこと？」

肩の力がほぐれてきたのか、佐伯は気さくに返した。下の名前で呼ばれたことに多少の馴れ馴れしさを感じるが、それが元来の彼女の性格なのだろう。

自己紹介の内容からは文学少女といった印象を醸し出していたが、借りてきたネコの皮をかぶっていただけで、実は明朗活発な女の子なのかもしれない。

「まあね。転校ってしたことないから」

「わたしはこれで二回目。慣れたわけじゃないけど、まだ平気、かな？」

「一度目はやっぱり緊張した？」

「そうだね……小学生のときだけど緊張よりも、転校したくないという気持ちが強かったなあ」

「やっぱり、子供のころだと友達と別れたくないよね」

「……………」

佐伯は口を閉ざした。なにか、へんな話題を振ってしまったのだ

るうか？

「言いたくないのならば別にいいよ」

「別にネガティブなことじゃないんだけど、なんだろうなあ。て、照れるっていうか……」

「なるほど」

大方、好きな人がいたという話なのだろう。

「はい、ウーロン茶。なに話していたんだ？」

とそこに、ウーロン茶を持った持史が話に割り込んできた。

「佐伯の昔話だよ。どうやら、彼女は転校生の玄人らしい」

「へえ、全国を股にかける風来の美少女か」

「そうだ。佐伯が行くところ嵐が飛び交い、稲妻が走る」

元ネタなんてわかんと思って口にしたわけではなかったのだが

「なんで、わたしが『炎の転校生』なのよ！」

なぜか佐伯が乗ってきた。

「あはは、なんかそれっぽいねっ！」

持史は原作のマンガを知らないのだろう。見当違いの合いの手を入れる。ふむ、いったいどういことなのだろう。

「佐伯は、男の兄弟でもいるのか？」

「え、いないよ」

「じゃあ、お姉さんは？ 妹さんは？」

佐伯がダメでも彼女の家族なら、などと姦計を廻らせているのだろうか、持史がこれ幸いと彼女の隣に座った。そして会話を続ける二人を横目に、用は済んだと俺は席から離れた。

さて、篠田はどこだ？

キョロキョロと周りを見渡すというオーバーアクションをとって見せる。

どれもこれもモザイクにしか見えないので判別がつかないため、自分から異性の相手を見つけ出すことは到底無理である。故に、この探しているフリをすることで、相手の反応を引き出す必要があるのだ。

「あ、双月くん。こっちこっち」

声がる方向に目を向けるとモザイクが大きく動いている。大方手を振っているのだろう。愛想笑いを浮かべながら会釈して、そのモザイクの隣に俺は座った。

「裕哉のことで聞きたいことがあるとか」

「うわ、単刀直入だね。でもそう。色々聞いてみたいことがあるんだ」

「質問形式でいいか？ 篠崎が聞いて俺が答える」

「どうして？」

「これならば、俺の主観による情報の取捨選択に基づく、俺の偏った認識でイメージされた裕哉にならないだろ？」

「難しいこというなあ。それでいいいいけど、一通り聞いたら、双月くんの意見を聞いてもいいかな？ 質問からわたしがイメージした関原くんと、双月くんのイメージしている関原くんの二つが生まれるから、別に問題ないでしょ？」

裕哉の見た目だけではなく内面も吟味したいという心積もりなのだろう。初めて話をした　と思うのだが、この問答から篠崎が聡明さが窺い知れた。そして、その率直さも。

内面に裏表がない異性は、個人的に好感を抱かずにはいられない。もちろん、彼女が本当に裏表がないのかはわからない。それは彼女に限ったことではなく、すべての人間の内面を伺うことはできないだろう。しかし、ただでさえ得体の知れないモザイクなのに、内面すらも不鮮明というのは未知の怪物のように恐ろしい。

フェイクだとしても、心地よく騙してくれるなら、怪物よりも詐欺師の方が俺にはよかった。

Chapter 1 - 5 : 崩れる境界線

篠崎に自分が知る限りの裕哉の情報をオブラートに包みながら吐き出した頃には、はめ込みの窓の外では宵闇が広がっていた。佐伯の歓迎会は散会することになり、二次会組と帰宅組に分かれた。俺は後者を選び、家路に向かった。

自宅に着くと、煌々と居間の窓から蛍光灯の光が漏れている。母さんが夕食の準備でもしているのだろう。

ファミレスでは、フライドポテトくらいしか固形物を口にしながら、ドリンクをいささか飲みすぎてしまった。ご飯は少ししか食べられないかもな、と思いながらドアをひねる。しかし、ガチャガチャと音を鳴らすだけで、押し開くことはできなかった。

「あれ？」

安全を考えれば正しいのだが、母さんは自分が家にいるときはあまり鍵をかけない人だった。だから、少し首を傾げたが、こういうこともあるのだろう。深く考えずに鍵を開ける。

ドアを開くと、玄関には妹の美希が啞然とした表情を浮かべて立っていた。

申し訳程度に膨らんだ胸部を晒し、頭に巻きつけたバスタオルと下腹部の下着以外はなにも身に着けていないという出で立ちだ。

「……………」

「……………」

二人とも声を出すことができなかった。

こういうシチュエーションは兄妹間ならばよくあるのかもしれないが、うちでは初めてのことであり、どう対処してよいのか頭が働

かない。

「あ」

最初に行動に移したのは美希だった。

「ド、ドア閉めて！」

「……おお」

漏れ出した怠慢な言葉とは別に、身体は迅速に背を向けた。

「早く服を着ろ」

「そ、そうだね」

階段を登る音が遠ざかっていく。部屋のドアが閉まる音聞こえると同時に俺はため息を吐いた。ふと気がつく、玄関のドアを閉めるとき無意識にだろう、ドアノブを強く握り締めていた。

まるで石のように固まっているようにも見え、指が動かないのではと懸念したが特に抵抗もなくひらいた。ひらいて、とじるを繰り返したあと、ひらいた手のひらを見つめる。

「なにやっているんだ」

そう呟いたとき、玄関のドアが開いた。

「なにやっているの？」

母さんが帰ってきた。

どうやら夕食の買い物に出かけていたらしい。

帰りの遅い父親を抜かした夕食は、なんとも微妙な空気であった。

裸を見られた美希は、その事実を払拭したい思いからか、妙なテンションの高さで場を盛り上げようと努め、母さんは、箸をまったく動かそうしない妹を咎め、俺はそれにツッコミを入れず、黙って動向を見守っている。

こつやって事実を羅列すると、言うほど微妙ではない気がしないでもないのだが、それでも皮膚感覚で微妙な空気を感じにはいられなかった。

すぐに食事を切り上げ、部屋に戻る。これで風呂に入り、目覚ましがわりのコンポをセットすれば、一日でやらなければならぬことは終わりだ。

いつもならばテレビかパソコンに勤しむところなのだが、今日はイベントが多すぎた。早めに寝て、明日にひかえよう。

夢を見た。俺は美希とセックスをしていた。

Chapter 1 - 5 : 崩れる境界線 (後書き)

Chapter 1 はここまで。

この先からが本番です。

Chapter 2 - 1 : 愛はすべてを肯定する

『Gooooooooooooo morning!』

朝。ミニコンポから流れる陽気なDJの声で、俺はいつものように目を醒ます。記憶にこびりついて取れない美希の肢体が後悔の念に、吐き出された精子まみれの下着が惨めさを浮き上がらせた。

なにやっっているんだ。

なにやっっているんだ！

ああ、確かにそうだ。美希は俺にとって唯一の若い肢体を眺め見ることが出来る存在だ。でも妹だぞ。本来ならばそんなことを欠片とも考えてはいけない。それなのに、たった一度、妹の、家族の裸を見ただけで自分の理性は崩れ去れるなんて。

俺はケモノに成り下がってしまったのか？

このままでは、美希に手を出してしまってもおかしくはない。だが、そんなことは自分の尊厳にかけてしてはならない。絶対にあつてはいけないのだ。

ならばどうする？

なにもしなければ、理性は冷蔵庫に保管され続けた野菜のようにゆっくりとだが確実に腐敗いくだろう。いつかは取り返しの付かない結末を迎えてしまつに違いない。

ならばどうする？

性欲の対象を別に向けなければならぬ。

佑哉のように、二次元の美少女を愛すべきか？ それは無理だ。いままでだって唯一の愛でる対象と認識していたにも関わらず、それしか欲望を吐き出すことができなかったのに、そうならなかったのだ。

俺には二次元の美少女を愛する資格を持ち得てはいない。

ならば いやまで。結論を出すのが早すぎる。冷静に考えよう。

二次元……そうだ、佑哉がこんなことを言っていた。

「悩みは自分ひとりでは抱えてはならない」

佑哉がそう断言した根拠は他でもない、マンガやアニメなどの影響である。

「古今東西、物語においてたった一人で悩んだ主人公はろくな目に合わない。そして、その悩みの大概は家族や恋人、友人によって解消される。ならば、最初から話した方がよい結果につながる」

確かにそうだ。

家族や友人に自身の悩みであるモザイク病のことを相談すれば、耳を傾けて一緒に悩んでくれるだろう。その結果、問題を解決できるかもしれない。

だが、こうも考えることもできる。

表面上では、自分のことを心配しているが、裏では何を考えているのかわかったものではない。愛すべき人たちが、自分のことを狂人として接してくるかもしれない、と。

このような考えがよぎるのが人の弱さであり、「人はそこまで強くないのだ」と自分のキズをさらけ出さないための逃げ道を用意させるのだろう。

しかし、優先順位が変わった。

モザイク病は、たしかに自分にとって大きなキズなのは間違いない。ただ、それが誰かを傷つけるわけではなかった。自分だけで完結する問題なのだ。

それが、自分の肉親を性欲の対象として捉えるようになってしまった。

一時の気の迷いに過ぎず、理性を持ってすれば妹に手を出すことなんてありえない。

そう考えることもできる。

しかし、そう信じていることができるほど自分を信用することはできない。むしろ、無意識下だからこそ、本性をさらけ出してしまったと疑っている。

確信がない以上、それを拠り所にはしたくない。

どんなに一人で考えても、この結論は覆りそうもなさそうだ。

ならば、相談しよう。しかし、いきなり確信に迫ったものではなく、いったんはオブラートに隠しながら。

すぐに性欲の赴くまま妹へ襲い掛かるほど、自分の理性は狂ってはいないのだから、ひとまずの妥協点としてはこのあたりが適当だろう。

色々と考えていたせいだろう、携帯電話のディスプレイには遅刻してもおかしくない時間を示していた。

急いで身支度をして家を出る。元々、美希とは生活のリズムが違うため、顔を合わせることもなかった。

いつもと変わらないモザイクまみれの通学路を走り、校門に差し掛かったときだ。

ここまでくれば遅刻の心配はないだろう、一息をついたとき、視界の隅にモザイクのない女性の姿を捉えた。

「!?」

俺は目を疑り、辺りを見渡した。しかし、ブレザーを着込んだ男子生徒とモザイクに集団に隠れてしまったのか、その姿は見えない。妹は別の学校であるため、その可能性はありえない。母さんに関しては考えるまでもないだろう。

とするならば、男を女と見間違えたか、存在を知らない肉親が同じ学校に通っているか、本格的に気が狂ったのどれかだ。

だけど

辺りを見渡していると、後ろから佑哉に声をかけられた。

「おはよう、同志庸一。なにやら険しい表情をしているが、財布でも落としたのかな？」

「いや、そういうわけではないんだが……そんなに険しい表情をしているか？」

「いつも仏頂面をしているのが同志じゃないか 失敬。目を皿にして真剣になにか探しているように見えたのでな」

「探し物が……」

その空を掴まない返答に、佑哉は首をかしげた。

「とりあえず、教室へ行こう。あと、相談したいことがある。放課後、暇か？」

「予定はある。が、同志の悩みならばその時間を作ろう」

「悪いな」

「いいよ。録画は完璧だ」

予定があると聞いて気が引けていたのだが、裕哉の予定というのはアニメを指していたらしい。

毎度思うことだが、この親友に相談してよいのだろうか？
少しだけ躊躇せずにはいられなかった。

放課後。教室に俺と裕哉はいた。

部活動に所属しておらず、とりたてて学校に用もない俺は知らな

かったのだが、案外教室から人がいなくなるのは早いものらしい。数時間まで多くの人が出た場所が閑散としている光景は、物悲しさを感じさせる。西日が差し込む茜色に染められた教室がそれを強調して見せているのだろうか。

「ロマンティックなシチュエーションだね」

俺が抱いた感傷とはやや異なる感想を裕哉は口にする。

「告白するにはもってこいの舞台が整っているけど、まさか、そんな心積もりではないだろうね」

「同性愛に走るほど切羽詰ってないさ。それに、裕哉には愛する人がいるだろう。二次元美少女よめがいる人間に不倫を持ちかけるなんて野暮なこともしたくない」

「同志はわかっているものでうれしいね」

裕哉はにやりと笑った。

「それで、我輩にどんな相談を持ちかけるつもりなんだい？」

そう、それが問題だ。授業中に考えてみたのだが、今自分が抱えている問題をオブラートに包むのは大変に難しい。モザイク病と妹への劣情。どちらも、異常のレッテルを貼られるようなものであり、なるべく避けて話したい。しかし、それを避けてはなにも話すことができなくなってしまう。

授業中に考えた結果、こつ話を切り出すことにした。

「小説を書くことと思っているんだが、書く前に意見が欲しくてね」

「おお、それはすばらしい。実は我輩も書きたいと思ったことがあるんだ。でも、なまじ文章に戯れているのが問題なんだろうね。理想は天よりも高く、自身の書く文章は地に這いずるほど低く見えてしまう。故に、書きたいという意欲は入り口で留まり、書きあげるまでの道程を歩むことができないでいる。いや、別の言い方をしよう。我輩には根性がないので、書き散らかした散文は小説の体を成す前にハードディスクの肥やしとなっている」

「まあ、そんな自分を卑下することはないさ。実際、俺も書き上げることが出来る保障なんてない」

「そうだね。賞賛は書き上げたときに改めて言おう。で、どんな内容なんだい？ ライトノベルかい？」

「ラノベかどうかの判断は任せるよ。内容は、異性に対してモザイクがかかってしまう主人公の話だ」

と、自分の病気をフィクションであるが風に取り付くつて言った。さながら「俺の知り合いの話んだけど」と引き合いに出して本音を告げるような言い回しだが、自分の病気は常識の範疇からは確実に外れている。仮に本当だと言っても信じてくれるとも限らないならば、そういう設定なんだ、と創作物であるが如く説明した方が先入観なしに話に乗ってくれるだろう。

どうやら、モザイクという設定は裕哉の琴線に触れたらしく、楽しそうな表情を浮かべた。

「それは、面白いね。当然、恋愛ものなんだろう？」

「そうなるのかな？ とりあえず、話の筋を話すと、主人公は男で、

女性がすべてモザイクに見えてしまう。唯一の例外が家族なんだけど、アクシデントのせいで、妹に欲情してしまうようになる」

別に小説のアイデアを欲しいわけではないので、妹に夢精したことを含めて、自分の身に起こったことを話した。

「ははん、主人公は妹萌えを受け入れる、いれない話になるのだな」

「話を聞いていたのか？ それに受け入れるも受け入れないも、家族に対して欲情するのは問題だろう」

「そうかな。妹とはいえ女性じゃないか。好きになるのになにが問題あるんだ？」

「兄妹だぞ？」

「そういえば、同志には妹君がいたな。一人っ子の我輩にはまったくもって羨ましい環境といえるが、妹君がいるとなると受け入れづらい話なのだろう。しかしだね、人という存在を描くのならば、そんなのどうでもいい話じゃないか」

裕哉がなにを言いたいのかさっぱりわからない。

それが顔に出ていたのか、裕哉はやれやれと肩をすくめた。

「では、一つに質問をしようか。なぜ、妹とセックスをしてはいけないのだ？」

「な、なにを言っているんだ。妹を暴行するなんてゲームじゃあるまいし」

「そうだね。我輩もそう思うよ。リアルでの暴力行為は最低の所存だ。なんのために、ゲームの注意書きがあるのかと」

ふざけているのかと一瞬思ったが、ここで茶化すような人間ではないことを俺は知っている。事実、佑哉は真剣な表情を浮かべていた。

「確かに、家族間の性行為　近親相姦を忌諱する感情はわかる。《インセスト・タブー》という言葉が示すように、社会的観点から見ても、生物学的観点から見ても、そう考えるのが正しい認識だからだ。しかし、恋愛感情というのは社会的基盤や本能に基づくものなのだろうか？　近所の目を気にしなければならぬといえども、種々の保存へ通じるといえば確かにそうだろう。しかし、人間にはその先がある。すべてから逸脱した《愛》の営みを行うことだって動作ない動物だ。獣に成り下がり、妹に手を出してしまうのが問題だ。ただし、妹を心から愛し、その愛を妹が受け入れれば、暴力ではなくただ純粋な愛の営みとなる」

それは青天の霹靂、もしくは瓢箪から駒が出てくるような意見であつた。

確かに、そういう考えもできよう。

しかし、俺は妹を愛していない。

自覚をしていないだけなのかもしれないが、到底そういう風には考えられないのだ。

だから、その意見を受け入れることはできない。

「主人公は肉親以外の女性すべてにモザイクがかかる。しかし肉体を持って余している。そして二次元には興味はない。ならば、妹と愛のあるセックスすればいい。裕哉の言いたいことはわかるよ。でも、なんだろうなあ、こういつてはなんなんだが、俺は意外と常識的な

人間なんだろうな。たとえゲームのように血が繋がっていないかたとしても、そういう問題ではなくて、妹とセックスを容認するような流れはどうかと思う」

「同志ならばそう答えると思ったよ。ならば、その物語の主人公もここまで考えて、そう答えて欲しいね」

「そこまで考えるのは行き過ぎなんじゃないか？」

「でも、ここまで考え付いたのならばある客観的な事実が生まれる。妹への性行為を否定しているのならば、衝動的になって妹に手を出すことはない。それは、理性ではなく感覚的な結論なのだから」

感覚的な結論？

「ちょっと待て。こんがらがってきたぞ。もう少し分かりやすく説明してくれ」

「簡単なことだよ。現実や社会的立場、性別などの障害は、衝動や情熱といった感情の前には紙の壁に過ぎない。逆を言えば、そういった感情がなければ乗り越えることができなのさ。この主人公は、妹の裸を見て欲情した。確かにそれは本当なのだろう。でも、襲い掛かりたいとも執着もしていないのだろうか？ ならば、問題を起こすような行動は起こすわけがないし、むしろ襲い掛かるような展開になる方が不自然だともいえるだろうね」

「そうなのだろうか？ 詭弁に騙されているような気がするが、自分の都合のよい話であるため、素直に受け取った方がよいのかもしれない。」

「だいたいね、この主人公は悩みどころの前提が間違っているんだよ」

と佑哉は、納得しようとする俺の顔に指を向け、設定構築が甘いと言わんばかりに言い放った。

「妹を襲い掛かる苦悩が間違いだっていいのか？」

「そう！ その妹に囚われている！ 対象が妹じゃなくて、クラスメイトの女性だったら襲い掛かってもいいのかい？」

それはダメだ。

ああ、なるほど、今となってやっと冷静になれた気がする。

妹の裸を見て欲情してしまった罪悪感。

それをモザイク病の自分を特別な人間だと思い込むことで問題から目を逸らし、悲劇の主人公に仕立て上げていただけなのだ。

「なるほどね」

と口では言いながらも、素直に納得できないことがある。

「でも、この主人公は、妹しか若い肢体を知らないんだぜ。性欲が理性や感情を抑えることはできるのか？」

「青い時代に生きる我輩たちはいつだって性に貪欲だからね。その危惧はごもつともだ」

佑哉はにやりと笑った。

「だったら、恋をすればいいんだよ。妹のことを忘れるくらいの、

「おもしろい」の「おもしろ

Chapter 2 - 2 : 比較的当たり前な恋愛論

「性欲の矛先を他に向けるというわけか。確かに、問題となっているのは、妹だけという状況になっていることだしな」

「同志の言い回しは身もふたもないなあ。それに、妹だけないですよ。母親だっているじゃないか」

冗談をいう佑哉を軽く小突いた。

「さて、どうしたものかな。考えるまでもなく、手段は三つしかないんだが」

「そうだね。二次元に走るか、男色に染まるか、モザイクに恋するか。個人的にお勧めなのは、最前者だけだね。二次元はいいよ、実に可愛らしい。常に愛らしい」

「佑哉の手前、否定するような言葉になるが、それはさすがに最後にしたくない」

「じゃあ、男の子を愛するかい？」

「それもなあ」

一部の女性や一時期の流行のように、同性に恋する展開というのはフィクションならば美しく描けるのかもしれない。しかし、俺にとっては現実の話であり、自分が男に恋をすることができるのかと問われれば、否定しか結論を出すことができない。

「もし、お前がそういう立場になったら、男を愛することができ
るのか？」

「どうだろうね。自分で言うのもなんだが、それなりに綺麗な顔立
ちだと思っているよ。とはいえ、我輩に愛すべき人がいる。相手に
言い寄られたくらいじゃ変わらないかな。我輩から好きになったら
別だけどね」

と裕哉は強くは否定しなかった。

「となると、残るはモザイク。一番難易度が高いのを選んだね」

「区別はできないけどな。だからこそ面白いんじゃないか」

「で、どういう話にするんだい？」

「そうだな、ちなみに俺が置かれている状況と似たようなシチュエ
ーションのゲームや小説はないのか？」

「それはあるよ。ゲームだったら『顔のない月』や『光を……』が
そうかな。特に後者がシチュエーションが近いと思うけど、参考に
ならないと思うよ」

「そうなのか？」

「同志もユーザーの一人だからわかると思うけど、古今東西の美少
女ゲームは女性から主人公に近づいていくか、事件の渦中に巻き込
まれているときに恋に落ちるんだ。この物語は違うだろう？ 妹へ
の欲情から目をそらすために、主人公には、別の女性と恋をしたい
という漠然とした目的と積極性が存在している」

たしかに、世には恋愛ものが数多く存在しているが、自分から恋をしたい恋愛をしたい、という物語は多くはない。あるにしても、一目ぼれや憧れなどの片思いの要素が前提条件で付加されているか、そういう主人公が別の目的を手に入れ、結果としてカッコいい可愛らしいところを見せるようなものとなる。

「じゃあ、参考にするようなものはないのか」

「そうでもないよ。とびつきり有名な作品がある」

「なんだ、それ？」

「『ときめきメモリアル』」

それは美少女ゲームのパイオニアとも呼べる作品のタイトルだった。俺でも知っているような作品であるだけに、その意図がわからなかった。

それが顔に出ていたのだろう「やれやれ」と裕哉は呆れたような表情を浮かべる。

「ときメモは、初期パラメーターのままでは誰とも恋仲になることができない。しかし、プレイヤーの努力によって誰からも好かれる人間へとなる。つまり、同志の物語の主人公だってそうだ。最初から魅力的なパラメーターの持ち主でないのならば、魅力値を上げればいい。そうすれば勝手に女の子が近づいてくるし、そうれなくとも自分から声をかけてナンパをすればいいだけのこと。それで、問題が解決だ」

確かに、それはそうだ。これは現実に置き換えてもそうだろう。

魅力的な人間がモテる。容姿に限った話ではなく、運動神経がよく
体育祭で活躍したり、文化祭でクラスを盛り上げるリーダー的な人
間などは、異性に関心を持たれやすい。至極当たり前の話しすぎて、
まったく考えもしなかった。

なるほど、待つのではだめなのか。

ガラガラ。

そのとき、俺と佑哉の二人きりしかいない、夕日が差し込む教室
の引き戸を開く音が聞こえた。

「あ、関原くんに双月くん。二人とも教室に残ってなにしているの
？」

姿を現したのはモザイクであつたが、その声に聞き覚えがあつた。

「ああ、篠崎氏じゃないか。我輩たちは友情を深め合っていただけ
だよ」

やはり、篠崎だつたらしい。自分から「篠崎か？」と尋ねるのは不
自然になるため、佑哉が彼女を憶えていたのが幸いだった。しか
し、俺との出会いのときもそうだったが、佑哉は興味があるなし関
係なく、人の顔と名前を憶えるのが得意なのだろう。

「君こそ、何用得教室に戻ってきたんだい？」

「わたしは忘れ物したただだよ」

そう言いながら、篠原は机でもロッカーでもなく俺たちに近づい
てきた。

「友情を深め合っていたって、もしかして、二人はそっち系の人な

の？」

その言葉には、楽しそうな雰囲気が含まれていた。俺は呆れたように短息を吐き出したのだが、佑哉は笑みを浮かべる。

「なんで、関原くん笑うの！ も、もしかして、本当に？」

「それはない！」

思わず俺は叫んだ。すると、佑哉もうなずき「それはないね」と言う。

「残念だと思うけど、我輩たちには男色のケはないよ」

残念どころか、ほっとしていると思うぞ、と俺は心の中で呟いた。しかし、なにが残念だと言うのだ。篠原も同様のことを思ったらしい。

「なにが残念なの？」

「おや、女の子はみんな、ボーイズラブを嗜んでいるのではないのかい？」

その返答に合点がいった。佑哉が笑ったのは、転校生のときもそうだが、物語のお約束を垣間見たからなんだろう。篠崎には到底そんなことがわかるわけもない。モザイクの下でどう対処してよいのか困った表情を浮かべている姿を想像したのだが……どうやら違ふようだ。

「そんなことはないよ。まあ、確かにそういう娘もいるけどね」

「へえ、やっぱりいるのかい。少なくとも我輩にはわからない感覚だなあ」

「逆に、たとえばアイドルグループで、 ちゃんと ちゃんは
デキてる、とかって思ったりはしないの？」

「ないね。たとえその二人とも好きでも、別に他の女の子と仲良くしてても別に浮気だとは思わないし」

なにそれー、と言って篠原は笑い声を上げる。ふむ、これはこれは。俺は人知れず笑みを浮かべていた。

佑哉の言動は一事が万事こつこつという内容に占められている。故に、普通の人間は関わりうるとはせず話を切り上げようとするのだが、篠崎はそうしなかった。となると、昨日の話は本当なのだろう。篠崎は佑哉に興味を抱いている。もしかすると、忘れ物をしたのも嘘で、実はこの状況を狙っていたのかもしれない。

「そういえば、関原くんは、佐伯さんの歓迎会には来なかったよね。なにか用事あったの？」

「ああ、愛すべき女神に会う約束があったからね」

篠崎がなにを思って佑哉のことに好意を抱いているのかはわからないが、妄言を放つ男への想いは空へと散ったに違いない。

そう想っていたのだが、篠崎は話を切り上げようとはしなかった。

「それって、アニメの女の子だね？」

「そのとおり。二次元世界に暮らしている女神様だよ」

「ふーん、男の浮気性の話は聞いたことあるけど、そんなに女の子を愛して、彼女たちは嫉妬しないのかな？」

篠崎は現実を引き合いに出しながら、佑哉の物語で構成された世界に介入を始める。

会話に引くことなく、そう切り込むところをみると、あらかじめ準備していたのかもしれない。

「おもしろいアプローチだね。確かに、一人の女の子を愛し続ける人たちはいるが、我輩も例に漏れず多くのオタクはとっかえひっかえ女の子を取り替える不定な輩にも見える。そして、その女の子は、そうしたダメな我輩たちを怒ることはない。彼女たちの愛に甘んじるともいえよう」

「ダメだってわかっているのに、どうして変えないの？」

「それは簡単さ。彼女と我輩は不変の愛で結ばれているからだよ、必ずね」

「まったくわからん発言だな。いったいどういう意味なんだよ」

佑哉の謎の発言に俺は想わずツッコミを入れた。すると、佑哉はにやりと笑う。

「簡単なことだよ。現実には死が二人を分かつまで不変の愛を語ることはできないけど、物語ではカーテンロールが降りた時点でそれが確約される。つまり、不変の愛が生まれたのだから、たとえ我輩がほかの娘を愛しても絶対に覆されないのさ」

そのむちゃくちゃな詭弁に俺は何も言うことができなかった。

「それにね、世界中の愛の総量なんて決まっているのかい？ もしそうならば、神様は永遠の愛を誓わせながら、きつとできやしないって、せせら笑っているに違いない。でも、我輩はそうは想わない。愛は永久に尽きることなく溢れているんだよ」

「関口くんは誠実だね」

俺と同様に呆れていると想っていた篠崎が、驚くべきことにそんなことを言った。思わず、彼女の方を向くが、モザイクが蠢いているだけで、その表情はうかがい知ることはできない。でも、口調から察するに冗談でもなさそうだ。

好きな相手にあわせているのか？ いや、まさか。恋は盲目とも言うが、佑哉の妄言は百年の恋だって冷ますに十分だろう。

佑哉も篠崎の発言には驚きを隠せなかったらしい。自信という仮面をつけた表情が崩れている。

「そんな顔しないでよ。だって、こういうことでしょ。現実には愛する人を見つけたら、その人を永遠に愛するって」

なるほど、そういう考え方もできるのか。

「俺は愛する人をけっして裏切らないという宣言をしたようなものなわけだな」

「……うむ、そう端的に語られると、少し恥ずかしいな」

佑哉は珍しく照れた表情を浮かべた。

「同志も相談の途中で悪いが抜けられない用事を思い出したので失礼するよ。篠崎氏も、また機会があったら」

「じゃあ、またね、関口くん」

佑哉はそう言って足早に教室から出て行った。抜けられない用事とは片腹おかしい。論破されたわけでもないのだが、恥ずかしくなって居たたまれなくなったのだろう。

「やれやれ」

「関口くんは、やっぱりおもしろいなあ」

「からかったわけじゃないんだろ？」

「そんなわけないじゃない。それとも、関口くんって、持論しか認めないタイプの人なの？」

「そうじゃないと思うけどな」

「なんか、薄弱な言葉だなあ。どうして？」

「いや、佑哉とそこに至るまで話した人間をみたことないし」

「なるほど」

篠崎はモザイクを大きく動かしながら笑い声をあげた。

「それにしても、篠崎は俺とこんな話をしていていいのか？ 俺が佑哉になにを話すのかわかったものじゃないだろう」

「それなりに双月くんを信用しているっていうのもあるけど、別にそれでもいいかな、って思っているしね」

「どづいう意味だ？」

「接点がないからね。まずはそれが一番大切じゃない？」

「なるほど」

芸能人と付き合うことが難しいのは、まず知り合うきっかけがないからである。接点ができて、初めてチャンスが生まれるのだ。佑哉が先ほど言った「ナンパをすればいい」というのも同じで、相手との接点を作るためには必要な手段なのである。

「で、篠崎はこのあとどづするんだ？」

「どづするんだって？」

「どづアプローチをするのかってことだよ」

「とりあえずは仲のよい友達を目指そうって思っているから、とりあえずメアド交換かなあ」

「意外と慎重なんだな」

「正直、関口くんのことかわからないからね。とくに恋愛観がまったく読めないし」

「二次元への愛と違つと」

「そうだね。フラレない、別れない恋愛とは違うもの。だから、そのへんがわからないなあって。告白した方が早いつていうのならばそうするけど、断られたら終わりじゃない?」

確かに、我輩には愛する人がいるので付き合えない、とか言いそうだ。

「しかし、ファミレスのときには訊かなかったけど、佑哉のどこがいいんだ?」

「だって、おもしろそうじゃない」

「それだけ?」

「あと、カッコイイと思うよ」

恋愛に深い理由はないということか。

「そういえば、二人は友情を深め合っていたつて言ってたけど、どんな話をしていたの?」

「なんてことはないさ。ただの雑談だよ」

「そうなの? 関原くんて、用事がなければすぐに帰るじゃない。だから、真面目な話でもしているんじゃないかなつて思つて、入るの躊躇していたんだけど」

「やっぱり、忘れ物したつていうのは嘘だったのか」

「へへへ」

篠崎はたぶん舌を出して笑って見せたに違いない。

「そういうこと。でも、話したくなかったら別にいいよ」

さて、どうしようか。

篠崎がいうように話す義理もないが、今後の指針のため、異性から意見を聞いてみたいという思いもある。だからといって、裕哉と同じ話を振り方をするのはどうだろう？

「……まあ、あれだ。俺が彼女が欲しいって話をしていたんだよ」

「えー！ 意外！」

ありきたりなことから話を広げようと思ったのだが、思いのほか強い反応があった。

「意外ってなんだよ。俺だって、人並みに異性には興味はあるぞ」

「そうなの？ わたしの印象だと、女の子のこと完璧に無視しているようにしか見えなかったけど」

「そうか？」

「無視っていうのも違うかな。なんだろう、興味がないっていう方が正しいのかなあ、特定の人と話しているところを見たことないし」

「よく知っているな」

「……あのさ、ちょっと確認してもいい？　もしかして、わたしのことを全然憶えてなかったりする？」

「まったく。どこかで話したことってあるっけ？」

「最悪」

表情はわからないが、その口調から気分を害していることが読み取れた。

「冷静に考えてみて。まったくの見ず知らずの人に、気になってい
る人のことをいきなり尋ねる？」

「そういうこともあるだろうって思っていた」

「だとしても、関口くんよりも前に双月くんのパーソナル情報を知
ろうとするって。双月くんが二枚舌の嘘つきだったり、関口くんを
愛していたりする可能性があるんだから」

「それもそうだな」

「はあ、そんな人間だから、関口くんと仲がいいのかなあ」

篠崎は、耳に届くような大きなため息を吐き出した。

「それで、いつ話したことがあるんだっけ？」

「中学のときの文化祭。双月くん、実行委員だったでしょ。そのと
きに結構しゃべったんだけどね」

確かに俺は文化祭実行委員をしていた。しかし、篠崎と話した記憶はまったく思い出すことができない。

「高校になるまで一度も同じクラスになったことはないけど、小学校から一緒だったしさ。興味あったし、個人的には仲良くまではいかないけど、それなりに交流を深めたつもりだったんだけどなあ」

「耳が痛い話だね」

「まあ、別にいいけどね。でも、そうかあ、双月くんが彼女が欲しいと思うんだあ」

まるで誰か俺に気を持っている人間がいるような含みのある言い方であるが、勘違いして自意識過剰ととられるのも恥ずかしいので、あえて尋ねることはしなかった。

少なくとも俺は、顔が整っているわけでもなく、体格も平均的、スポーツもそれなりにこなすことができるような平凡な人間である。変人に恋する篠崎のようにマニアックな人間がいるとは思えない。

「じゃ、そろそろ帰るね。と、その前にメアド交換しよ」

断る理由もないので赤外線を使ってアドレスを交換する。「バイバイ」と言いながら、篠崎はモザイクを大きく揺らして教室から出て行った。

「さて、俺も帰るか」

手かばんを持って昇降口へ向かう。長いこと教室で話していたせいか、廊下には生徒の姿もモザイクの姿もなかった。コツンコツンと夕日によって茜色に薄く着彩された廊下に足音が響く。階段に差

し掛かったときに、俺のではない、別の足音が耳に聞こえてきた。
特に興味を持ったわけではなく、何の気なしに振り向く。
そこには、見知らぬ女生徒がつまらなそうな表情を浮かべながら
歩いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1737o/>

コイスルシカク

2011年8月12日23時20分発行